

小学校のインクルーシブ体育授業における児童の 困り感に関する事例的研究

—行きしがる低学年児童とこだわりのある高学年児童を対象として—

池本愛（滋賀大学）

1. 目的

本研究では、体育授業において児童が困り感を抱く事例とインクルーシブ体育授業の成功事例ならびに反証事例を観察・考察し、インクルーシブ体育授業の推進にむけた要件整理を行うことを目的とした。

2. 研究方法

1) 対象校：滋賀県 A 小学校自閉情緒学級在籍児童及び、1年生、6年1組在籍児童

2) 調査期間

2017年4月12日(水)～2017年1月24日(水)

3) 調査内容・方法

- ① 参与観察による事例収集（フィールドノート）
- ② 教員への半構造化インタビュー
- ③ エスノグラフィーの手法を用いた考察

3. 結果と考察

1) 行きしがる低学年児童事例（全3事例）

①体育授業に安定して参加できていた1学期や運動会の時期を越え、行きしぶり始めた2学期上旬。



授業前に「着替えるのが恥ずかしい。」と島田（仮名）の声が聞こえる。授業中も周りの児童たちとはかかわることなく早々に支援学級へと戻っていった。この授業前の「恥ずかしい」という言葉と、周りの児童たちと関わることを躊躇する姿から、島田の中で「周りへの意識」や「対人関係」への芽生えが起きていると考えられる。周りの児童たちも、距離を取ろうとする島田とのかかわりに戸惑いを見せ始めている段階である。

②島田は積極的になわとびに取り組むも成功は難しく、周りの児童からも「できない子」という見方がされてしまった。しかしその後の授業で、交流学級の女子児童Mからのアドバイスをきっかけに、連続一重跳びができるようになった。この姿から、教師は細かいゴール設定（合理的配慮）を行い、児童たちがそれぞれに頑張る友達の姿を互いに認め合える手立てが必要だと考えられる。

2) こだわりのある高学年児童事例（全4事例）

①前転の練習に取り組む

内田（仮名）の近くには、iPadを手にアドバイスをす



る児童Aと見本や補助をしようとする児童Dの姿がある。内田は2人からのアドバイスを受け懸命にそして楽しそうに練習を続けていた。この事例からは、学級内での児童同士の共感やかかわり合いの広がりや深まりがみられる。

4. 結論

全7事例より、インクルーシブ体育授業の推進に向けた要件を以下にまとめた。すなわち、授業づくりにおいて最も重視すべきは、児童の発達を考慮したアセスメントを核とする、教材の特性に応じた合理的配慮である。そのために教職員間での情報交換を密に行い、児童たちの「できる」に加えて、「かかわる」を促す手立てが必要である。

5. 主な参考文献

- 1) 長曾我部博（2006）インクルーシブ体育における「まさつ」が子どもの相互理解に及ぼす影響。障害者スポーツ科学，4(1)：37-46。
他11編